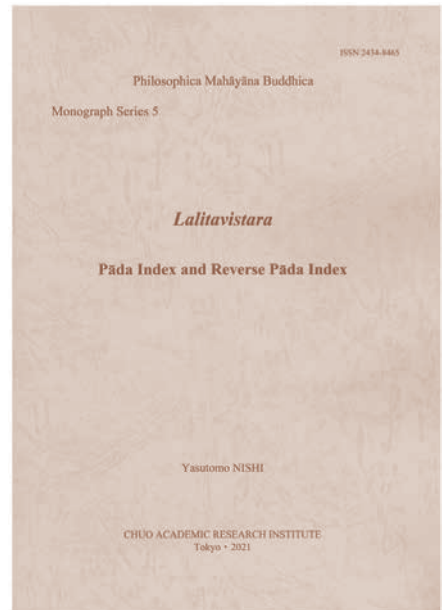
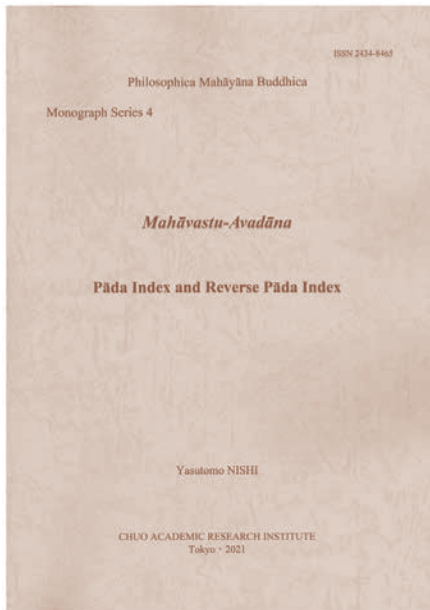


## *Philosophica Mahāyāna Buddhica* Monograph Series 第4号、第5号を発売



弊研究所は、昨年11月15日に *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series* (大乘仏典思想叢書) 第4号と第5号の2冊を同時発売した。編纂は学術研究室の西康友主幹による。これまで、法華経における文献学的研究の基盤整備として、ジャイナ教聖典、初期仏典、初期大乘仏典の語彙・詩脚索引や写本カタログなどを収録した *Philologica Asiatica* (全28号28冊：1994-2012年)、および *Philosophica Asiatica* (全4号6冊：2014-2017年) を刊行してきた。本叢書シリーズを含めると39冊の刊行となる。本叢書シリーズ第1-2号では、梵文法華経研究の基準テキスト『ケルン・南條本』と、その底本の一つ梵文法華経写本中央アジア伝本カシュガル本の、『ローマ字校訂本 語彙索引』(第1号が正順語彙索引、第2号が逆順語彙索引)、第3号では続編としてこの詩脚(偈文)索引を刊行している。詳細については、先般の「CANDANA 286号 研究所ニュース」を参照いただきたい。

本叢書シリーズ第4号で取り扱った『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』は、漢訳もチベット訳も現存しない。本文の使用言語はパーリ語や古典梵語だけでなく、仏教混淆梵語も多く散見され、仏教混淆梵語經典中で最古の要素を含むとされる。この内容には、釈尊がはるか昔の前世に燃燈仏から授記されたことや、マーヤー夫人のもとに誕生し、初転法輪をはじめとする布教を展開するといった釈尊の伝記に加え、釈尊の教理が記述されている。この校訂本としてスナール(É. Senart.)

がヨーロッパ所蔵ネパール系6種類写本を用いて校訂した全3巻(1882-1897年)があり、これが『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』研究における基準テキストとなっている。本文の解読には、古典梵語の知識・文法だけでは不十分である上に、多くの言語学上の問題が未解決のままである。この解決の糸口に向けて、弊研究所ではすでに語彙研究資料として『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』正順語彙索引を、文法研究資料として逆順語彙索引(*Philologica Asiatica Monograph Series 25*)を刊行し、仏典研究者へ基礎資料を提供してきた。これをさらに進捗させ、詩脚索引の発刊に至った。

また、本叢書シリーズ第5号で取り扱った『ラリタヴィスタラ』は、『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』とともに仏教混淆梵語經典中でも最古層とされる仏伝文学の一つである。『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』の約三分の一の内容で、釈尊の生誕から初転法輪までが述べられている。この基準テキストには、ミトラ(R. L. Mitra. 1875)とヴァイドヤ(P. L. Vaidya. 1958)による2つの校訂本が知られるが、本叢書ではローマ字電子化テキストがWeb上で入手できるヴァイドヤ校訂本に基づき、この詩脚索引を発売した。

梵文法華経の本文は、『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』と『ラリタヴィスタラ』と同様に、詩脚(偈文)と散文の2つの文体から構成される。偈文は韻律(個々の語の長短音のリズム)に従うことが一般的であるが、梵文法華経には韻律に従わない偈文も多く存在す

## 森岡 清美（もりおか・きよみ）先生

令和4年1月9日、東京教育大学名誉教授、成城大学名誉教授、大乘淑徳学園学術顧問、中央学術研究所講師で文学博士の森岡清美先生がご



逝去されました（享年98歳）。

森岡先生は大正12年に三重県でお生まれになり、東京文理科大学哲学科倫理学専攻卒業。東京文理科大学助手に就任以降、同専任講師、東京教育大学助教授、同教授、同文学部長、成城大学文芸学部教授、同文芸学部長、民俗学研究所長、淑徳大学社会学部教授、同大学院特任教授などを歴任されました。

歴史社会学、家族社会学、宗教社会学の研究に従事。とりわけ家族社会学を打ち立てられ、その大家として知られています。平成2年には紫綬褒章を受章。平成24年には、『無縁社会』に高齢期を生きる』（アユスの森新書 佼成出版社）を出版。ご自身の体験も踏まえつつ、高齢期においても家族や友人とのつながりを育てる努力をしていけば、無縁化は避けられることを家族社会学の視点から論じられました。

著書には、『真宗教団と「家」制度』（創文社）、『家族周期論』（培風館）、『近代の集落神社と国家統制』『華族社会の「家」戦略』（以上、吉川弘文館）、『明治キリスト教会形成の社会史』（東京大学出版会）ほか多数があります。

昭和53年から57年までの5年間、『立正佼成会史』の編纂委員として本会の歴史研究に取り組み、主として本部の歴史を担当。開祖さまの聴き取りにも参加されました。また、この時の研究成果をもとに『新宗教運動の展開過程』（創文社刊）を出版され、本会の発展過程の分析を世に問われました。

このほか長年にわたり弊研究所主催の講師研究会や善知識研究会での講師や、「真理と創造」、「中央学術研究所紀要」、「チャンダナ」への寄稿をいただきました。これまでのご指導に深く感謝申し上げますとともに、ご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

る。この理由として、多くの研究者たちは、初期の梵文法華経が非梵語（中期インド＝アリア語）で編纂されたが、伝承されていく中で古典梵語に書き換えられて書写されたと主張している。だが、古典梵語のままでも韻律に従う梵文法華経偈文も多く存在する。

著者はこの問題に着目し、既刊の本叢書シリーズ第3号『ケルン・南條本』と「梵文法華経写本中央アジア伝本カシュガル本」詩脚索引とともに、今回刊行した第4号『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』詩脚索引、第5号『ラリタヴィスタラ』詩脚索引の3つの基礎資料を用いて、経典間の偈文を調査・対照したところ、多くの並行（同一）・類似詩脚（偈文）を見出すことができた。このことで梵文法華経偈文の特徴を明らかにでき、梵文法華経は仏教混淆梵語経典中の最古層に分類される『マハーヴァスツ・アヴァダーナ』や『ラリタヴィスタラ』を引用、あるいは参考にして編纂された可能性が文献学的・言語学的視点から大いに期待できることがわかった（詳細は西康友. 2021. 「梵文法華経の偈文における韻律の特徴—初期仏典等との類似偈文句の対照を通じて—」. 『印度學佛教學研究』第70巻第1号. 430 (93) - 425 (98) を参照：[https://researchmap.jp/YasutomoNISHI/published\\_papers/36208451](https://researchmap.jp/YasutomoNISHI/published_papers/36208451)）。

なお、弊研究所では、本叢書シリーズのより広い活用を願い、インターネット上に公開（<https://www.cari-saddharmapundarika.com/philosophica>）している。これまでに刊行してきた*Philologica Asiatica*、*Philosophica Asiatica*の両シリーズについても中央学術研究所ホームページ「論文検索システム」（<https://www.cari.ne.jp/search/>）からPDF版をダウンロードでき、多くの研究者が入手・活用できる。

本叢書シリーズを多くの研究者に提供することで、仏教経典に横たわる諸問題解決に資する一助となれば幸いである。このたび刊行された第4号と第5号は、科研費助成研究〔基盤（C）一般・身延山大学（国際日蓮学研究所）：課題番号21K00058〕「梵文法華経諸問題解明のための基盤テキスト構築—『ケルン南條本』校訂へ向けて」における関連研究成果の一部である。今後も、法華経成立・伝承過程の解明に基づいた法華思想研究に向けて、新しい視座を獲得できる一つの可能性を見出すような研究成果を、本叢書シリーズから刊行する予定である。